

# 佐賀試験地

公益財団法人日本植物調節剤研究協会  
佐賀試験地 主任  
市丸 喜久

## はじめに

佐賀試験地は、九州北部の水稲適2試験を実施する試験地として、令和3年度に開設をした新しい試験地である。佐賀というと、広大な佐賀平野の肥沃な水田、特に稲麦二毛作を思い浮かべる方が多いと思われる。しかし、当試験地は佐賀県北西部の唐津市にある。県内では良食味米の生産地として位置づけされているが、零細な稲単作地帯となっている。

市内の農業は、果樹はミカンが中心で全国最大級のハウスミカン産地。施設野菜においても、いちごを中心に県内シェアは高い。また、「佐賀牛」の県内屈指の生産地域でもある。

一方食では「呼子のイカ」で知られ、史跡では、朝鮮出兵時の豊臣秀吉が築城した名護屋城跡をはじめ、名だたる名将の陣跡が存在する。

交通の便としては、県庁所在地である佐賀市、隣県の福岡市ともに車や電車で1時間程度と利便性は高い。

九州の公設の試験場所を見渡すと、有明海沿岸地域にある公立試験場は、粘質な土壌が多い。また、熊本では黒ボク土壌、鹿児島では、シラス土壌割合も高いなど特徴的な土壌も目立っている。これらのこともあって、概して葉害の発生程度が大きいと考えられる砂壤土の九州地域普通期水稲で、移植栽培試験場所の拡大が求められ新設に至る。

## 1. 試験圃場の立地と土壌特性

試験圃場のすぐ脇には、1級河川の厳木川が流れており、河川改修以前は増水氾濫を繰り返した歴史があり、私も2回ほど冠水したとの記憶がある。

試験圃場には約30a区画一枚を充て、隣接する圃場3aに長さ約10mのパイプハウスを設置し、試験資材置き場としている(図-1)。なお、ハウスの脇では次年度の試験に用いる雑草種子の増殖などを行っている。

試験地土壌は清武統に属し、中粗粒灰色低地土・灰色系の土壌である。佐賀では、農業試験研究センター三瀬分場も砂壤土水田であるが、作期は山間地の早植え地帯となっており、品種も異なっている。また、三瀬分場と同様に、母材は花崗岩であるが三瀬では粗砂の割合が高いのに対して、佐賀試験地は細砂の割合が高い土壌である点で相違がある。

## 2. 試験地開設と試験の条件

試験地開設にあっては、地元農家の集合体である生産組合の承諾を得る必要があり、その了解を得るため地元公民館での説明会を開催した。条件として示されたのが、試験区設置にあたり「地元の移植時期より遅くしてほしい」という要望



図-1 ハウス



図-2 試験区設置

であった。多くの作業の人員、作業資材が農道を占めると作業に支障があるとのことが主な理由であった。このため試験圃場は、地域慣行品種を用いるが、地元の移植のピークより5日から1週間後の移植としたところである。その結果として、移植期は佐賀平坦部とほぼ同一時期となっている。

移植時期が遅れることで、周辺水利慣行と比較して苦勞をするのが、「中干しの時期」と、体系処理の35日～40日の後処理とのタイミングである。出来るだけ地域水利慣行に合わせる努力が必要となっている。

また、足場・枠設置、回収には、多くの人員を要する。このため土曜日曜のタイミングで、地域活性化・振興に貢献している地元NPO法人の会員を中心に、出役をお願いしているところである。しかし、降雨があっても作業変更が出来ないことが悩ましいところであり、天気予報に一喜一憂する時でもある(図-2)。

なお、事務所は圃場から約2km離れた市役所の遊休施設をNPO法人が借用されているが、その一室を市から有償で借用している(図-3)。

### 3. スクミリングガイ対策

当該試験地の試験実施において、最も注意を払うのは、根絶が困難なスクミリングガイの防除である。冬場の耕起と併せて、水田期間においては、移植から1ヶ月余りは、7～10日毎にスクミリングガイ対策の薬剤処理を実施する。また、試験区予備枠を一定数設置して、処理前に雑草発生が著しく少なくなる試験枠が生じた場合は予備枠を活用している。目視出来る成虫は当然捕獲出来るが、目視出来なくとも枠雑草発生に影響があることも希にあり、本試験地の永遠の課題でもある。



図-3 事務所

### 4. 試験実施上の工夫

試験地は砂壤土であるため、荒代掻き、代掻きを実施しても、日減水深が約1cm前後ある。筆者自身が年齢を重ねていることもあり、処理して以降1週間は、処理時期毎に色を変えた目申を枠のU字管とラベルのポジションにおいて、常に目視出来るようにして、水管理に誤りがないように細心の注意を払っている。

また水稻の生育調査においては、NPOのメンバーでは個人差を生じる恐れがある。このため、研究・普及組織OBとJA指導員OBの「プロ」に出役をお願いし、データの信頼性を高めるように配慮している。

### おわりに

地元農家の方は、試験1年目は完全に高みの見物であった。しかし試験2年目以降は、圃場作業中に町内の農家も含めて缶コーヒーを持って、栽培の相談や雑談に来られるようになった。これからも、地元農家や生産組合との接点は大切にしながら、試験を実施していく所存である。

なお、試験開始2年目以降は、足跡などからアライグマやイノシシと推察される野生動物が圃場周辺で出没するようになった。恐らくは、巖木川周辺の雑木林の中に潜んでいるものと考えられる。試験水田への実害は出ていないが、注意が必要である。

今後とも地元農家の理解を得つつ、九州研究センター、県農試、NPO会員、研究・普及・JAのOB等と連携を取りながら、適正かつ精度の高い試験実施に務めていきたいと考えている。